

海外レポート

カンボジアでこども病院の立ち上げに関わって

NPO法人ジャパンハート

医師長期ボランティア 嘉 数 真理子

1. 長期ボランティアに参加したわけ

スオスダイ（こんにちは）！カンボジアで医療活動をしている嘉数です。沖縄生まれ、沖縄育ち、出身校は高校野球で有名な沖縄尚学高校です。中学生の時に、父親が脳腫瘍で亡くなったのをきっかけに医師を志しました。琉球大学医学部に入学し、病院実習中に小児の脳腫瘍の患者さんを受け持ったのですが、その子は闘病の末に亡くなってしまいました。しかし、1年以上にわたりその子に関わる中で、小児がんを治療する先生方の熱心な姿に心を打たれ、将来は小児がんを治療する医師になりたいと思いました。

卒業後は沖縄県立中部病院で初期研修、小児科の後期研修を行い、様々な先生方にご指導いただきました。その後は静岡がんセンター、静岡こども病院で2年間、小児血液腫瘍の研修をして、2011年には沖縄に戻り、沖縄県立南部医療センター・こども医療センターや琉球大学病院、県立北部病院でも小児血液腫瘍科の医師として働きました。沖縄に戻ってからは小児がんだけでなく、血友病や乳児血管腫（莓状血管腫）の治療など、今までに県内であまりやる人がいなかった分野にも取り組みました。

私の専門とする小児がんは、日本では年間2,000人前後の患者さんがいます。昔は不治の病と言われていましたが、現在では治療の進歩により70-80%以上が助かるようになりました。しかし、発展途上国では10-20%未満とかなり生存率にギャップがあることを知り、愕然としました。

沖縄での仕事にやりがいを感じていましたが、途上国で小児がんのギャップを埋めたいとの思いが年々強くなり、毎年休暇を利用してアジアの国で

のボランティア活動に取り組むようになりました。ちょうどそんなときにジャパンハートという団体がカンボジアに小児がんも含めた小児病棟（こども病院）を作るという話を聞き、実際に短期ボランティアに参加した上で、長期ボランティアとしての参加を決めました。

2. ジャパンハートとカンボジアについて

ジャパンハートは小児外科医の吉岡秀人先生によって2004年に設立された国際医療NGOです。「医療の届かないところに医療を届ける」を目的として、ミャンマー、ラオス、カンボジアなどの途上国だけでなく、日本の僻地・離島や被災地でも活動しています。

カンボジアは人口約1,600万人と日本の1/10強ですが、平均年齢が24歳であり、15歳未満の人口が31.6%と子どもが多い国です。（ちなみに日本の平均年齢は46歳、15歳未満の人口は12.3%）

1970年代からの内戦、ポルポトによる大虐殺のため当時の人口800万人中200万人が亡くなりました。ポルポトは教師、政治家、医療者などの知識人を迫害し、多くの医療者が殺害されるか国外逃亡したため、残った医者はずか45人とされています。医師不足のため医学生がわずか1年で医者となり、知識も技術も未熟な医師が増え、その医師が次の世代を教育するという状態が続きました。そのため自国の医療に対する信頼度は低く、富裕層は近隣のタイやベトナム、シンガポールの病院で治療を受けています。4人に3人が医療保険を持っていないため、貧しい人たちは伝統医療に頼るか、重症になるまで病院を受診せず、必要な医療を受けることができて

いません。

ジャパンハートは2008年よりカンボジアでの活動を開始し、まずは現地のニーズをつかむため様々な村に出向き無償で診察する巡回診療を行い、手術が必要な患者さんには現地の病院を間借りして手術をしていました。しかし、医療拠点を持たないままの活動では緊急時の対応ができず、定期的な治療ができないこと、継続的な人材育成ができないという問題がありました。そのため、2016年にプノンペン郊外のウドンという地域にジャパンハート医療センターという病院を設立しました。



ジャパンハート医療センター外観

現在、ベッド数は40床、外来患者数は約900人/月、月に2-3回程度手術ミッションを行い手術患者数は約100件/月です。常にいる日本人医師は私1人ですが、短期ボランティアの先生方や、カンボジア人の研修医4人と協力して内科・外科・産婦人科・小児科など様々な患者さんを診ています。



病院での診察風景

カンボジアは熱帯モンスーン気候で1年中暑い国です。気候と、人が明るいところも沖縄に似ている

と思います。病院スタッフの住居や食事は病院近くの宿舎で提供されます。一日のスケジュールは6時半のラジオ体操に始まり、宿舎の掃除、食事（カンボジアの料理は辛すぎず美味しいです）後、8時から病院で朝のミーティングが始まります。午前、午後で外来、入院患者さんを診察し、17時には夕方のミーティングをして終了です。ただし、手術ミッション中は夜遅くまでかかることもあります。さすがに私が手術をすることはありませんが、小児の麻酔担当として入ることがあります。休みもきちんと取れるので、プノンペンに行ってイオンモールで買い物したり、美味しい日本食を食べに行ったりしてリフレッシュしています。

3. カンボジアでの小児がんの現状とこども病院について

カンボジアでは小児がんの統計がないため実数は不明ですが、隣国ベトナムでの小児がん患者数が1万人あたり108人と報告されていることより、カンボジアでは年間500～600人の小児がん患者がいると推測されます。しかし、カンボジア国内からの報告によると実際に診断されているのは年間200人程度であり、半数以上が診断すらされずに亡くなっているのが現状です。その理由としては患者・家族だけでなく医療者の間ですら小児がんは治らないと思われるため、紹介されないことがあることや、紹介されてもお金がなくて治療が続けられないことにあります。

カンボジア国内で小児がんの治療が可能な施設が数カ所あるものの、小児がんの中でも手術が必要な固形腫瘍（神経芽腫、腎芽腫、肝芽腫など）は、手術ができる小児外科医が少なく、ほとんど治療がされていない状況でした。当初、ジャパンハートでは固形腫瘍の小児患者さんを日本に連れて行って治療を行っていました。しかし、カンボジア国内で治療ができるようにならなければ継続的な支援にならないため、熟練した日本の小児外科医が現地に赴き手術や現地スタッフへの指導を行い、さらに抗がん剤治療も含め無償で提供する方針としました。現在、2人の小児がん患者さんに手術や抗がん剤治療を始



代表の吉岡先生、小児がん患者さん・家族と一緒に

めています。カンボジア国内の小児がん診療施設と連携して、さらに増やしていきたいと思っています。

今は成人の患者さんが多いのですが、今年6月末にはこども病院をオープンして小児を中心に診ていく予定です。カンボジア人医療スタッフの教育・指導を行い、2030年には現地のスタッフを中心に運営できるような体制を目指しています。小児科医はspecialistである前に、こどもの全身を診るgeneralistだと思っています。沖縄で学んだことを活かし、小児がんに限らず、小児科全般を診て病気で困っている子どもたちとその家族をサポートし、未来を担う子どもたちを1人でも多く元気にしてい



NCPR（新生児蘇生法）講習会後にみんなで

きたいです。

私を含めた多くの日本人はボランティア参加ですが、患者さんの治療費、現地スタッフの雇用・教育の費用は全て日本からの寄付金でまかなっています。こども病院に必要な物品を選択して寄付できる寄付サイトも近日オープン予定です。数日から参加できる短期ボランティアもあり、医療関係者以外でも参加できて毎年250人を超える人が参加しています。興味のある方はぜひジャパンハートのホームページ（<http://www.japanheart.org/>）をご覧ください。みなさまのご支援、ご参加をお待ちしております！